
最期の門番

真浦塚真也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最期の門番

【著者名】

NZマーク

N7390X

【作者名】

真浦塙真也

【あらすじ】

最期の門前広場での、ちょっとためのお話

やる価値はある。ただ、自信はほつきと言えば全くない。

そもそも、あの爺さんが言つたことは真実なのか。いや、こんな現実離れた状況で、真実かどうかなんて考へるほうが馬鹿げているかもしない。それに爺さんは、現に今ここにいないじゃないか。きっとあの爺さんは本当に成功したんだ。

どうせこのままここに滞在していととしても、結果は見えている。地獄行きだ。だつたら、やるしかない、少しでも希望があるのなら。

「えー、では15番から35番の方々。列にお並び下さい。」

来た。ついに来てしまった。もうやるしかない。腹をくくれ。俺は自分の意志を体現するよつて、頬をピシャリと強く叩いた。まだ頬の感触を感じることはできる。痛みも感じじることはできる。でも、あの門をぐぐつてしまえば……。

もうやるしかない。ここで躊躇してどうする。俺は……。

俺は、生き返りたいんだ。

「なあ、兄ちゃん。あんた、生き返りたくないかい?」

途方にくれていた俺に、爺さんは突然話しあげてきたのだつた。

「えつ。いや……あの……その。」

俺は戸惑つてしまつた。しかしその戸惑いは、爺さんが突然話しあげたからではなく、ボロボロなTシャツ短パン、ビーチサンダルで、カップ酒を手にしている爺さんの風貌に驚いたからでもなかつた。

「ここがどこのかつて顔をしているねえ。」爺さんは俺の考えていたことをズバリ言い当てた。

「ええまあ。」

俺が曖昧に頷くと、爺さんは可笑しくてたまらないといつた満

面の笑みを浮かべた。前歯の欠けた黄ばんだ歯が見えた。

「でも、あんたも少しほは分かつていいんだる。ここがどんな場所なのかは。」

爺さんはまた笑みを浮かべた。ああ、やつぱり。

「……はい。大体は。」

今度はさつきよりも多少自信を持つて頷いて見せた。

「……あの世つてことですか。」

俺は胸の中で否定し続けた現実を質問してみた。

「まあ、みんなそう言つんだよねえ。」

爺さんは分かる分かると言うかのようにうんうんと頷きながら、持つていたカツプ酒を口に含んだ。

「どうだ、一杯。」「いや……遠慮します。」

俺は丁重にお断りをした。酒を飲める気分には到底なれない。というより、得体の知れない老人が口にしたものに手を出すことなどうしても躊躇われた。

「そうか。いい酒なんだけどな。」

そう言つと、爺さんは残りの酒をグイッと口に含んだ。

「すいません。それより聞きたいことがあるんですけど……。」

話を元に戻そうとすると、爺さんはまあ待てと言わんばかりに、手のひらを俺に見せつけた。それからゆっくりと頭を2回3回と回し、こちらまでゴクリと聞こえそうなほどに勢いをつけて飲み込んだ。骨と皮しかないような喉が酒を飲み込んだことを教えてくれる。

「おおつふあー。いい酒だ。いやあー、酒は良いもんだ。兄ちゃん、あんたもこいつやって酒を飲んでみたらいい。これが一番酒の回りがいいってもんだ。」

そう言つと、爺さんは一ヶと今日一番の笑顔を見せた。

なんなんだ、この爺さんは。兄ちゃんも飲んでみたらいいだと？飲めるわけないじゃないかこの状況で。といふか、なんなんだこの状況は。爺さんもよく飲めるよなこの状況で。その前に、爺さんはなんで酒なんか持つているんだ。買ったのか？買えるわけないじ

やないか、この状況で。なんなんだ。本当になんなんだ。なんなんだ、この状況は。

「兄ちゃん。独り言が聞こえるほど気持ち悪い」とはないぞ。」

爺さんがニヤニヤ笑いながらこちらを遠慮なしに覗き込む。しまつた、つい口に出してしまつていたのか。俺は慌てて口を結んだ。

「まあ、兄ちゃんの気持ちも分からなくは無いがね。そりゃ焦るさ。うん焦る、焦る。」

爺さんはそう言つと、またカップ酒をぐびと飲んだ。まったく、ただの飲んだくれじゃないか。俺はあからさまなめ息を吐いて、爺さんにぶつけるべきイライラをそつと地面にぶつける。

横田でチラシと爺さんに手をやる。爺さんは幸せそうに酒を飲んでいた。爺さんになつてもこの飲みっぷりだ。若い時は相当の酒豪だったに違いない。

あれ？その時やつと俺は異常に気が付いた。

爺さんはさつきカップ酒を飲み干したはずだ。なのにまた飲んでいる。何故だ。そんなこと有り得るのか？

俺はハッと顔を上げて、爺さんを凝視する。爺さんは一緒キヨトンとした顔をしたが、俺の問いたいことを理解したのか、ああと小さな声をあげた。

「兄ちゃんもやつてみればいいんだ。欲しいです、と念じてみる。うーんとそうだなあ、よし、ウーロン茶だ。ほらウーロン茶が欲しいです、と念じてみる。」

何だこの爺さん、もづ酔いが回つたのか。そう思い爺さんの戯言を苦笑いでいなそつと思つたが、爺さんがほりやつてみると顎で促してくれる。

仕方ない。俺はまたあからさまなため息を吐いて、爺さんの言うとおりに感じてみることにした。

ウーロン茶が欲しいです。

突然右手に重さを感じる。

驚いて目をやると、右手が液体の入ったコップを握っている。飲んだわけではないが臭いは確かにウーロン茶だ。

「うわあつっ！」

思わず情けない声を出して、ウーロン茶の入ったコップを地面に放り投げてしまった。

パリーンとコップの割れる音が辺りに響いた。

周りにいた人々の目が一斉に集まる。怯えた目をしている人もいれば、何やってるんだよと怒りの目を向けてくる人もいた。俺は誰に聞こえる訳でもない謝罪の言葉を口にして、小さく頭を下げた。

「あーあ、兄ちゃん何やってるんだよ。タダだからってものを粗末にしたらダメだぞお。」

爺さんはそう言いながら、また酒を口に含んだ。酒の減り方からして、また新しいカップ酒を手に入れたのだろう。

「な、何なんですかこの現象。」

「さあな。まあ、最後のサービスつてもんなんじやねえーのか。まあ、俺にとっちゃ好きなだけ酒が飲めるから、嬉しいことこの上ないんだけどな。」

そう言いながら、また酒を飲む。左手ではちやっかりとさきいかを握っている。

もう。なんなんだこの状況は。念じたら好きなものは手に入る？ 最後のサービス？ なんだここは。地獄なのか、それとも天国なのか。いや、地獄というほど怖いことは起きてないし。でも天国というほど快適でもないし。ああ、もう。なんなんだ一体。

「だから兄ちゃん。独り言は聞こえない方が良いんだって。」

しまった。また口に出してしまった。だがもういい。聞かれたつていい。ここが何処で俺はどういう状況なのか、それをただただ教えてもらいたい。

「お爺さん、ここは一体…。」

「デケデク、デンテン！ デケデク、デンテン！」

俺の声を打ち消すかのように、突然大きな音が鳴る。

「兄ちゃん。」

爺さんが声をかけてきた。

「ここが何処なのか、奴らが教えてくれるよ。」

奴ら？ 俺は爺さんの発言に惑いながらも、恐る恐る音のするほうを振り返った。

1（後書き）

『見頂き有り難い』や『評価・感想等頂けると嬉しいで
す。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7390x/>

最期の門番

2011年10月19日21時11分発行